



西側斜面の8号窯跡 (東京都埋蔵文化財センター提供)

大丸遺跡からは、瓦を中心に焼いた奈良時代の窯跡が15基発見されました。窯跡は東・北・西の各斜面に築かれていますが、窯の構造や瓦の文様・製作技法をみると、丘陵の斜面ごとにまとまっていることがわかりました。

#### 東側斜面の窯跡群

1号・2号・3号・15号の4基の窯跡があり、大丸遺跡の中でも最も古い窯跡群です。武蔵国分寺の創建より古く奈良時代前半(8世紀前半)に操業が開始され、15号・1号→2号→3号窯の順で使われて、やがて北側斜面の窯へと移行します。これらの窯跡では須恵器と瓦が焼かれていますが、製品の供給先はわかっていません。



東側斜面の1号窯跡

#### 北側斜面の窯跡群

北側斜面からは10号・11号・12号の3基の窯跡が発見されました。これら3基の窯は東側斜面の窯跡群に続いて使われたもので、10号→12号→11号窯の順に操業されました。このうち10号・12号窯では剣菱文軒丸瓦けんびしもんのみまるがわや唐草文軒平瓦からくさもんのみひらがわが焼かれ、これらは川崎市寺尾台廃寺や武蔵国府に供給されたと考えられます。11号窯は最後に使われた窯で、西側斜面の窯と同時期に操業されたと考えられ、武蔵国分寺創建期の瓦が焼かれました。

**西側斜面の窯跡群**

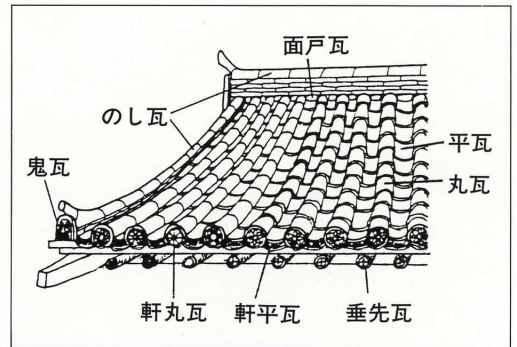
西側斜面からは8基の窯跡が発見されています。ここでは奈良時代中期の武蔵国分寺創建期の瓦が焼かれており、単弁八葉蓮華文軒丸瓦と三重弧文軒平瓦が特徴となっています。操業の順序は5号・13号→8号・9号→7号→6号窯と考えられます(4号・14号窯は不明)。瓦の供給先は武蔵国分寺で、なかでも七重塔、北院建物で主に使われました。

**文字瓦について**

武蔵国分寺からは多くの文字瓦が発見されていますが、これは造瓦を武蔵国内の各郡に負担させた証拠であり、瓦には負担した郡名や郷名を示す文字が刻まれることとなります。大丸遺跡からは主に西側斜面の窯跡を中心として文字瓦が発見されています。郡名としては、多(多麻郡)・都(都筑郡)・捺(捺沢郡?)・珂(那珂郡?)・摘(橘樹郡?)・兒(児玉郡?)があり、郷名としては白(狛江郷?)・島(湯島郷?)・川口(川口郷)があります。

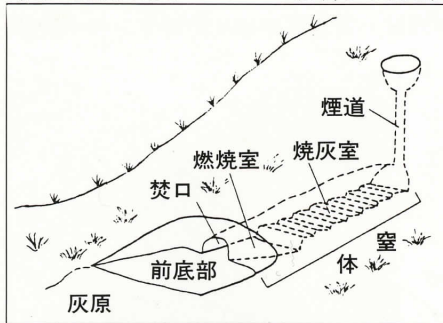
**国分寺へ運ばれた瓦**

武蔵国分寺は金堂・講堂・七重塔をはじめとして七堂伽藍を備えた大規模な寺院でした。ここで使われた瓦は、金堂だけでも約10万枚と言われ、全体の数は膨大な量になります。国分寺創建期には大丸遺跡の地で瓦が焼かれ、やがて瓦谷戸窯跡群へと瓦生産が拡大し、その後造瓦の負担は武蔵国全郡に及び埼玉県の南比企窯跡群や東金子窯跡群などでも生産されるようになりました。



屋根瓦の名称

(図は埋蔵文化財センターの資料より掲載)



瓦窯の構造



平瓦の作り方

位置	東斜面	北斜面	西斜面
窯跡	4基 (1~3号,15号)	3基 (10・11・12号)	8基 (4~9号,13・14号)
時期	奈良時代前半 (8世紀前半)	奈良時代前半~中期	奈良時代中期 (8世紀中頃)
供給先	?	川崎市寺尾台廃寺 武蔵国府 武蔵国分寺	武蔵国分寺 (七重塔・北院建物)
軒瓦		 剣菱文軒丸瓦	 単弁八葉蓮華文軒丸瓦
平瓦	 四重弧文軒平瓦	 唐草文軒平瓦	 三重弧文軒平瓦
平瓦	桶巻きづくり 格子・斜格子叩き (須恵器も焼く)	桶巻きづくり 一枚づくり 縄叩き	一枚づくり 格子叩き 縄叩き

瓦窯と出土瓦の関係